

生活意欲を向上させる「作業」



器具を用いた個別訓練を行う「運動ゾーン」

社会医療法人財団新和会(松本隆利理事長)は愛知県安城市で病院、訪問看護、訪問通所リハビリテーション等を運営する。昨年9月に法人初の通所介護「八千代リハビリデイサービス彩(いろどり)」を開設。「より良い生活へと変わる場所」をコンセプトに、利用者の自己実現につながる作業を提供、集団生活での役割を自ら見つけるきっかけを作り、生活意欲を高めよう。

人生観へ作業を結びつける

作業選びで欠かせないのが、初回面談のアセスメント。心身機能だけでなく趣味・嗜好、生活歴・職歴などを作業療法士がしっかりと聞き取る。そこから本人が大切にしていることや、どんな時が楽しいか、誰のためにになりたいかなどを分析し、作業の目標に設定。各作業のもつ感情への働きかけや人・社会とのつながり、生活の変化などの特性とマッチングし、決定する。「特に大事なものは、作業を通じた心の変化です」と清水さんは強調する。希望や目標を叶える作業であるとなれば、スタッフが促さなくとも継続して取り組み、そして作業はやがて集団生活における「役割」への意識が変わっていくのだという。「例えば畑仕事、調理、皿洗い。この3つはいずれも食事に対する役割です。時には他の利用者に依頼されて行うこともありませう。皆のためになる、役に立つという自覚がやりがいを生むとともに、利用者どうしのつながりにもなります」。

生活期リハを支える豊富な作業

「彩」内に入ると、壁に大きく「運動」「創作」「家事」「憩い」と書かれた4つの生活ゾーンがある。運動ゾーンではトレーニング器具を使った機能訓練が行われており、「創作」ゾーンでは主に女性の利用者がテーブルを囲み手芸に没頭。家事ゾーンの中央にはアイランド型キッチンが置かれ、利用者が昼食準備の手伝いをするのだという。ひとつひとつ、野菜を両手で収穫してきたものだ。

これらは全て同所で行われる「作業」として、1日の生活スケジュールに組み込まれている。選択肢は実に100種類。全リハビリ専門職が作業療法の視点で設計している。大まかな作業の方向性は事前に決めておくが、当日何をするかは利用者がデイに到着後、自ら組み立てる。「本人が目的をもって、

見逃さない。これにQOLの評価尺度を示すSF-36、幸福感や生きがいを測るPGCモラルスケールを加え、全体の評価を行う。

適切な栄養で運動効率アップ

利用者によっては、身体機能面で少々厳しい作業でも、意欲を優先しチャレンジ的に課すことも多い同所。ケガをしないよう最低限のサポートは必要だが、あわせて作業・運動効率を高めるための栄養摂取も重視している。開設当時より活用しているのが、クリニコ(東京都目黒区、中林将宏社長)の栄養補助ゼリー飲料「リハたいむゼリー」。筋肉の代謝を高めるアミノ酸BCAAを豊富に含み、すっきりとした味わいで飲みやすい。運動後30分以内の摂取が自宅で、水分補給も兼ねている。

同法人病院の卸業者を通じて商品を購入し、希望する利用者への販売。3月現在で約15人が、主に運動ゾーンでのトレーニング後に利用している。「適切な運動には、そのための身体をつくることを考えなくてはなりません。リハビリと栄養は同時並行です」と清水さんは説明する。

立ち上がりや歩行速度をみる「タイムアップアンドゴースト」ではほぼ全員が改善。また、利用者へのアンケートでは「しゃがんで物を拾うときに踏ん張って力が入るようになった」「ちょっとしたことで疲れにくくなった気がする」等の感想も寄せられている。

地域を最適化する作業

同所は要介護者のみを対象とし、開設から5カ月たった3月現在の登録人数は50人。うち9割を要介護1〜2が占める。要支援に改善し、サービスを終了した

た利用者も既に5人いる。清水さんは「利用者の生活の大半は自宅。本当にしなければならないのは、自宅や周辺地域でも継続した作業・役割への環境整備です」と述べ、そのための課題に地域とのつながりがある。現在は、収穫野菜の販売や、地域イベントへの手芸品の出展等を行っている同所。作業に地域貢献という要素が加わることで、利用者の意欲も変わるそうだ。「安城市には別法人の高度急性期病院があり、当法人に求められる機能は回復期在宅。よって地域のニーズ把握は必須です。それに応える作業へ発展させ、地域の最適化をめざしたい」と清水さんは語った。

ベッド上でのご利用者の移動に

少ない力で介護が出来るシートです。

With WITH.Co.LTD.
Transfer Sheet